

「内科レジデントマニュアル」第4版

聖路加国際病院内科レジデント 編

国立東京第二病院総合診療科

青 木 誠

聖路加国際病院内科レジデント編集の「内科レジデントマニュアル」第4版が刊行された。

このマニュアルは、新しく入ってくる後輩レジデントが、夜間の救急の場で有効かつ安全な初期対応ができるように、先輩たちが自身の経験や失敗をもとに、数多くの勉強会で討議し、内科スタッフの指導の下に推敲を重ねてできたことが序文の中で述べられている。問題点の取り上げ方はレジデントの視点ではあるが、多くの医学情報の裏づけと指導医の適切な助言が背景に控え、聖路加国際病院の治療方針とも言えるものであろう。

内容はポケット・サイズということで、31の愁訴や疾患に絞り込まれているが、初期対応が適切であるか否かが予後に極めて大きな影響を与えるものが大半を占めている。各項目の初めには、頭の中に既にある情報を呼び出すのに役立つキーワードとも言える事柄や、取り組み方の大筋が書かれている。発症状況や身体所見が臨床決断に大きなウエイトを占める救急の場での、それらとの

り方、状態の変化に対応した処置をしながら可能な検査を行って鑑別診断を進めていく手順、更に、例えば動脈血ガスを検査する間隔など、頭に加えて直接手足を動かして診療にあたるレジデントの汗が感じられる内容と構成になっている項が多い。

研修医の困ることの1つに、どの薬剤を、どれだけ、どのように投与するかということがあるが、この点については患者に害を与えない原則が強調されている。また1アンプルに含まれる薬剤量、アンプルによって含まれる薬剤量が異なる薬品、配合禁忌、投与薬品の溶解法と病状の変化に合わせた点滴スピードや病態による投与量の調整などが先輩からの注意として懇切丁寧に記載されている。第一選択の薬剤が無効の場合や、投与した薬剤によって思わぬ副作用が現れて慌てたなどの経験のある人が少なくないのではないかとと思われるが、その対策まで記載されている項もある。

第4版では病棟からのコールが多い、発熱、敗血症に加え、夜間譫妄の項目が加えられているが、入院患

者数に高齢者の占める割合が増加している現状に即した選択と言える。

そのほか、8項目の診療中の事故と対策、薬剤投与量の算定に必要な各種の表などが記載されているが、どれもが研修医の臨床の中から浮かび上がった問題点を取り上げている。

記載されている救急対応の理解に必要な病態生理学的事項や各種の診断基準が57項目のサイドメモで解説されている。なぜこのような処置が、との疑問に答えるものとなっているし、また診断基準やテクニカルタームに馴染みのない研修医が先輩たちのディスカッションに入っていくための助けになると思われる。

ハウツー物は、一般に平面的な内容になりがちであるが、本書は、あたかも自分がシュミレーションの救急外来をやっているような臨場感があり、通読もできるマニュアルである。

● B6変型 頁360 図20 1995
定価3,296円(税込) 円400